

# 山内マリコ『メガネと放蕩娘』における富山と学生によるまちづくり

村上 瑞季

## はじめに

山内マリコは地方都市出身の女性たちをテーマにした作品を多く手掛けている富山県出身の若手作家である。『メガネと放蕩娘』では、地方都市で市役所勤めをする姉のタカコと、東京でカリスマ店員として働いていたが、シングルマザーとなり、地方都市に戻ってきた妹のシヨコの正反対な性格の姉妹を中心として、シャッター街も同然となった地元商店街を「メイクア」と託児所を組み合わせた施設の企画やファッションショー、マンスリーショップ《The Free Pocket》など、商店街の振興に向けて活動を行う。

作中に登場する商店街は、山内マリコにとって地元である、富山県富山市の総曲輪通り商店街、中央通り商店街をモデルにしていること<sup>一</sup>、作品を書くにあたって商店街の調査を行ったこと<sup>二</sup>が山内マリコ本人の口から語られている。特に作品を書くにあたり、非常に大きく影響を与えているのは、富山市中央通り商店街で一九九七年から二〇一三年に行われていた、大きな空き店舗を活用したチャレンジショップである「フリースポケット」とその運営を行っていた竹島昆布専門店の身の子さん、章江さん姉妹である。山内マリコ

はインタビューの中で次のように述べている<sup>四</sup>。

その姉妹は空き店舗が増えていくことに危機感を持って、活性化につながるようにと、若者向けにチャレンジショップ（将来自分のお店を持ちたい人が期間限定で試験的に出店できる複合テナント）を運営されていたんです。当時学生だった私はそんな思いとはつゆ知らず、そこで友人と面白い物を楽しんでいました。私が地元の活性化のために何かできないかと考えていたときに、ちょうどその姉妹と知り合えたこともあり、彼女たちをモデルにしたつづ、街のあり方を提起するような小説を書くことを決めました。

作品を執筆するにあたり、山内マリコは自身が学生時代に通っていた「フリースポケット」と運営を行っていた姉妹をモデルとすることを選んだ。その一方で、現在の商店街に通い、問題点の調査も行っていたことが同じインタビューの中で述べられている。現在山内マリコは東京都に在住であり、富山県には住んでいない。このことから、山内マリコのイメージの中に存在する総曲輪通り商店街、富山市中央通り商店街は、「高校生時代に通っていた商店街」と、「現

在作品を書くにあたり調査した商店街」の大きく二つがあると推測できる。『メガネと放蕩娘』の中における商店街は、この二つの商店街のイメージが重なり合うことで生まれていると考えられる。このことから作品の調査を行うにあたり、「高校生時代に通っていた商店街」と、「現在作品を書くにあたり調査した商店街」の両方の調査を行う必要があると考えた。

また、山内マリコが富山市をモデルとしていると明言している作品は『メガネと放蕩娘』以前にも存在している。それは、山内マリコ初の短編集、『ここは退屈迎えに来て』<sup>五</sup>である。

『ここは退屈迎えに来て』は、ある地方都市を舞台とした、八つの作品が収録された短編集である。作中の年代や主人公となる人物はすべて異なっているが、八つの作品のうち、七作品は一つの地方都市に関連している。この地方都市のモデルは山内マリコの地元である富山市であることが語られている<sup>六</sup>。

『ここは退屈迎えに来て』と『メガネと放蕩娘』では、同じ富山市をモデルとしているが、作中に書かれている地方都市の描かれ方は大きく異なる。『メガネと放蕩娘』と『ここは退屈迎えに来て』の中で描かれている地方都市について比較を行うことで、現在の山内マリコが持つ富山に対するイメージや変化について考察をする。

また、この作品において非常に特徴的であると考えられる点の一つに、初出<sup>七</sup>と初刊で大幅な書き換えが行われていることがある。初刊では加筆修正が多くある一方、削除された部分も多い。作品の結末も異なっており、まるで異なる作品のようにも見える。この削

除された部分と加筆された部分について、特に初刊で加筆された学生によるまちづくりについての考察を行う。

以上より本稿では、本編では山内マリコが作品を書くにあたって、モデルとした総曲輪通り商店街、富山市中央通り商店街の店舗や実際に行われた事業と作品内で行われた事業についての比較を行い、これらの実際に行われていた時期と作中の時期についての調査をする。また山内マリコが富山をモデルとしていた初期の作品と比較し、山内マリコの中の富山におけるイメージの変化についての調査を行う。また、初出と初刊の変更点や、初刊で加筆された学生によるまちづくりについて考察する。

## 一 作中における店舗とそのモデル

『メガネと放蕩娘』に登場する、主人公たちが暮らす商店街について、山内マリコはインタビューの中で、総曲輪通り商店街と中央通り商店街をモデルしていると述べている<sup>八</sup>。作中では具体的地名を出していないが、実在する店舗や場所をイメージしていると思われる店舗や場所が商店街内外でいくつか登場している。

作中に登場する店舗や建物、場所は商店街の中に四六か所、商店街の外に二か所の合計五八か所が登場している（表一参照）。この中には、具体的な店名のある場所と、何を売っている場所かのみを述べている場所が存在している。

これらの中には、作中には登場しているが、現在は総曲輪通り商

店街と富山市中央通り商店街には残っていない店舗も見られた。これらの店舗や場所を「高校生時代に通っていた商店街の店舗」と、「現在作品を書くにあたり調査した商店街の店舗」に分けて、それぞれについて検討してみたい。

## 一― 高校時代に通っていた商店街

山内マリコが総曲輪通り、中央通り商店街について書いた、「脳内《総曲輪く中央通り》散歩 in 1990, s」<sup>9</sup>を参考として『メガネと放蕩娘』と照らし合わせてみる。

「脳内《総曲輪く中央通り》散歩 in 1990, s」は高校時代に毎日のように総曲輪通りや中央通り商店街に繰り出して遊んでいた山内マリコが、帰省のたびにお気に入りであった店が閉まっていたことを嘆き、非常に活気のあった一九九〇年代の総曲輪から中央通り商店街を脳内再生するという内容である。この作中には「ロッテリア」、「ラルフローレン」、「無印良品」、「ワシントン靴店」、「喫茶店チェリオ」、「ブラウシシュガー」、「NICE CLAUPE」、「アンジェ」、「シーバーズ」、「Jack」、「109」、「ソニープラ」、「富山松竹」、「フオルツァ総曲輪」、「北陸銀行本店」、「長崎屋」、「米三」、「ポール・スミス」、「マツヤ」、「フリークポケット」の二〇店舗の固有名詞が登場している。この店名の固有名詞から、『メガネと放蕩娘』の中で全く同じ固有名詞が登場しているのは「ソニープラ」のみである。しかし、かつて「ファストフード」のお店があ

ったが、現在は潰れてしまっていることや、主人公のタカコが学生時代「名曲喫茶《白樺》」に通っていたことは、今は残っていない「ロッテリア」や山内マリコが学生時代「喫茶店チェリオ」に通っていたことを連想させる。また、「渋谷の駅前とはいかないものの、近い雰囲気があった」という点も「109」がかつてあったことを連想させる。これらの共通している店舗は作中で主人公のタカコが学生時代を回想するときに登場している店舗である。

作中の時代が二〇一三年から二〇一七年を中心としていることから、作中の主人公であるタカコの年齢の考察を行う。「第一章 二〇一三年 放蕩娘の帰還」において、二〇一三年に「20代半ばになっても結婚する気配」がないタカコが三〇歳手前に市役所職員となつてから、「広報課に配属されて三年が経つ」と語っていることが書かれている。また、「第七章 二〇一二年 再び、放蕩娘の帰還」において、作中における二〇一八年に「三十過ぎて結婚する気配すらなかった」タカコが結婚を報告したことが書かれている。タカコが三〇歳手前に市役所職員となったという書かれ方から、市役所職員となったのは、二〇代半ばから二九歳であり、若くても二七歳、一番上で二九歳と考えられる。また、山内マリコはインタビューの中で、登場人物たちの年齢設定について、「33歳く37歳の、中年のはじまり(´▽`)くらいの年齢設定」と語っている。以上のことから、「第一章 二〇一三年 放蕩娘の帰還」時点で、三〇歳以上であると考えられる。よってタカコが高校時代を過ごしていたのは、一九九〇年代であることが推測できる。

作者である山内マリコは一九八〇年生まれであり、一九九五年から一九九八年まで高校生であった。二〇一三年時点の年齢は三三歳であり、おおよそタカコの年齢と一致している。以上より、タカコの年齢は山内マリコ自身の年齢と近く、タカコの体験している学生時代と山内マリコの体験している学生時代はおおよそ同時期であることはわかる。よってタカコの学生時代における商店街での体験や思い出す学生時代の記憶は、山内マリコが実際に高校時代に体験した経験を反映させていると考えられる。山内マリコが持つている学生時代の総曲輪のイメージは、主人公たちの世界でも過去のイメージであり、活気のある商店街は過去のものとして語られている。以上から、作中における商店街とモデルとなった商店街の時代背景と店舗はかなりリンクしていると考えられる。タカコの記憶にあるかつての商店街は、山内マリコの記憶にある「脳内《総曲輪》中央通り」が大きく反映されていることが推測できる。

## 一―二 現在作品を書くにあたって調査した商店街

作品を書くにあたり、新たに商店街を調査したことは山内マリコによつて語られている。作中に登場している店舗は現在も残っている店舗が多いと考えられるが、主人公たち姉妹の実家である本屋はかつて商店街の中心に位置していた店舗がモデルであり、現在は残っていない。人物のモデルである姉妹の実家とは異なっている店舗がモデルとなっている点において、商店街の中心から物語中に

おける街づくりが広がっていくイメージがある。主人公たちの実家である本屋が作品の中盤で店を畳むことになった点も、現実とは異なっていることから、現在は店舗が残っていない店舗をモデルとすることに関連すると思われる。

このように作中ですでに店を閉めてしまっている店舗や、作品の途中で店をしまう店舗は作中の現代であっても、モデルは閉店してしまつた店である。また、ウチダ書店が店を閉めることとなり、市役所に勤める星野から「本屋が潰れて百円ショップなんかになつたら泣くぞ」と言われる場面は現実の総曲輪における「清明堂書店」の一階部分が百円ショップである「シルク 総曲輪店」に変わったことをモデルにしていると推測できる。

現実の総曲輪通り商店街や中央通り商店街に現在残っている店舗は、作中で名前のある《リスキージョイ》や《鹿島屋》などがある。これらの場所は山内マリコが実際に行ったことがある思い入れのある場所である。また、まゆみ先生の勤める、「地元の国立大学」のモデルは富山大学である。作中では、「地元の国立大学の社会学部、都市環境デザイン学科地域コース」の専任講師である原まゆみとそのゼミに所属する生徒たちがまちづくりに協力している。この「地元の国立大学」について、作中では「大学のキャンパスから中心市街地へ行くには、一級河川にかかった大きな橋を渡らなくてはいけない」、「でも公共交通機関はちゃんと通っていて、電車で十分とかからず移動できるし、バスもある」と書かれている。作中でキャンパスから中心市街地へ行くために渡らなくてはいけない橋

は、神通川に架かる富山大橋をモデルにしていると推測できる。また、「社会学部 都市環境デザイン学科地域コース」は、二〇一八年から新たに開設された富山大学都市デザイン学部と対応している。

このように作中における現在では、主要な場所にはモデルがある。特に、山内マリコにとって思い入れのある場所が選ばれていると推測できる。

店舗や場所以外に、作中におけるイベントのモデルも現在の商店街を調査して書かれている。作中に登場する、世界一長い海苔巻き、ファッションショール、商店街シェアハウス化計画、商店街での結婚式はすべて総曲輪通り商店街と中央通り商店街で行われた、「学生まちづくりコンペティション」で二〇二二年～二〇二五年に採択されたイベントがモデルであると推測できる。これらのイベントは、初出が書かれていた時期以前から書かれていた当時に採択され、実際に行われたものである。このように実際に行われた事業を受け、作中でのエピソードとして書かれている。

## 一一三 まとめ

『メガネと放蕩娘』で書かれている商店街は、山内マリコが学生時代に通っていた思い出と、作品を書くにあたり、調査した商店街の二つが大きく分けて存在している。

作中における過去の物事の多くは山内マリコの記憶の中にある

一九九〇年代の商店街であり、現在の商店街は作中で閉まる店を除いておおよそ現在残っている店舗である。特に作中において主要な場所にはモデルがあり、山内マリコ本人に関連深い場所が選ばれている。

店舗や場所以外には、「学生まちづくりコンペティション」で採択された事業がイベントのモデルとなっていることが分かる。このことから、学生によるまちづくりに対して関心を持つて調査を行っていたと考えられる。

このように本作では、この商店街でも当てはまる問題を取り扱いつつも、富山市で実際に行われた事業や場所を多くモデルとしている点から、富山との関連性は非常に高いと考えられる。山内マリコは過去に富山市をモデルとした作品を書いているが、その中でも最もモデルが特定しやすい作品である。

## 一二 フリークポケット

山内マリコは『メガネと放蕩娘』執筆後のインタビューの中で次のように述べている<sup>二</sup>。

チャレンジショップ（将来お店を持ちたい若者が期間限定で出店できる）という複合テナント形式を提案・運営している姉妹がいたんです。わたしも実際にそこで買い物をした思い出があった。商店街の活性化をテーマにしようと考えたとき、彼女たちを

モデルに、前向きな話を書きたいと思いました。

前章でも見てきた通り、『メガネと放蕩娘』では作品に登場する店舗や人物の多くが総曲輪通りと富山市中央通り商店街をモデルとしていることが作者の山内マリコから語られている。その中でも『メガネと放蕩娘』を書くにあたり、大きなきっかけとなったのは、「フリークポケット」とその運営を行った竹島昆布専門店の姉妹である。

第二章で述べた通り、作品中と現実の時代がかなりリンクしている中で、過去の出来事を作中の現代に登場させている「マンスリーショップ《The Free Pocket》」は異質な存在である。これは「脳内《総曲輪く中央通り》散歩 in 1990, s」の中で山内マリコが高校時代にモデルである「フリークポケット」に行っていたことが語られていることや、作品中で「マンスリーショップ《The Free Pocket》」が行われる二〇一七年には、現実の中央通り商店街で行われていた「フリークポケット」が終了している点からわかる。この「フリークポケット」については、「脳内《総曲輪く中央通り》散歩 in 1990, s」の中では、「いつも買い物ツアアのゴールだった」と語っていること、作品についてのインタビューの中で「当時まだ高校生だった私も通ってました。青春の思い出の場所です」と語っていることから学生時代に総曲輪、中央通り商店街によく通っており、非常に思い出深いものであったことが分かる。

あえて過去に行われていた「フリークポケット」をモデルとした「マンスリーショップ《The Free Pocket》」が、作中では現代のものとなっているのはなぜだろうか。

一つは山内マリコが「フリークポケット」が非常に希望に満ち溢れたものであるイメージを持っており、街づくりによる商店街の活性化に適していると考えていたであろうという点である。山内マリコは「脳内《総曲輪く中央通り》散歩 in 1990, s」の中で「フリークポケット」について「未来と希望が溢れているように映った」と語っている。また、現在の商店街について、山内マリコは次のように述べている<sup>二〇</sup>。

田舎ながらに、高校生がときめきながら繰り出せる街が、当時はあったんです。それが2000年を境に、郊外に大型チェーン店が増え、街から目に見えて人がいなくなりました。大学生になり、帰省のたびになじみある景色が変わっていったことをよく覚えています。

山内マリコが高校時代に通っていた商店街と比較し、現在の商店街は次第に活気が失われていたことについて述べている。このようにかつて活気があった商店街の中でも特に「未来と希望が溢れているように」見えていた「フリークポケット」は、現在の活気を失った商店街の、活気を取り戻す希望となりえると考えていたのではないだろうか。

もう一つは、現在まちづくりを行い、地方活性化を行うために必要な「よそ者・バカ者・若者」が「フリークポケット」のような場所であれば集まりやすいと考えたためではないだろうか。作中で地方活性化を行うことに必要な人物について次のように述べられている。

俗に地方活性化に必要なのは、よそ者・バカ者・若者の三人だと言われている。中の人だけじゃなにも変わらない。そこに、新しい風を送り込んでくれる存在が加わってはじめ、なにかが起ころのだ。しがらみがないよそ者、行動力だけはある無鉄砲なバカ者、そして若者。

作中では「よそ者」がまゆみ先生と潮見、「バカ者」がショーコ、「若者」が片桐であると書かれているが、「フリークポケット」のような場所にはこの三つの要素を持った人物が集まりやすいと考えられる。「フリークポケット」とモデルとした「マンスリーショップ《The Free Pocket》」は両者、空き店舗を活用し、店を持ちたい若者に対して安い家賃で場所を提供して、新規出店をサポートする事業である。商店街の外で生活を行う「よそ者」であり、店を持ちたいというやる気に満ち溢れている点は「バカ者」の定義とも一致している。そして、今は店を持っていないが、これから店を開きたいと考えている「若者」である。この地方活性化に必要な要素を持つ人物が「フリークポケット」で出店を行うのである。

また、「フリークポケット」に客として集まる人間も、これまで商店街にあまり来なかった「よそ者」かつ、出店内容に興味を持った新しいものの好きの「若者」が期待される。このように「フリークポケット」を行うことで商店街の現状を良い方向に活性化させる人物が集まりやすくなることが推測できる。

以上より、「フリークポケット」をモデルとした「マンスリーショップ《The Free Pocket》」をあえて現代に登場させた理由は、山内マリコが持つ「フリークポケット」の対する前向きなイメージと、地方活性化に必要な要素を持つ人物像が集まりやすいことから、商店街に現在必要な活性化に非常に適しているためであると考えられる。

### 三 山内マリコと地方都市

『メガネと放蕩娘』では商店街を中心とし、富山市をモデルとした地方都市を舞台としているが、山内マリコが富山市をモデルとした地方都市を舞台としたと明言している作品は他にもある。それは、山内マリコの初の短編集である連作、『ここは退屈迎えに来て』である。ここでは初の短編集である『ここは退屈迎えに来て』の中で書かれている地方都市と『メガネと放蕩娘』の中で登場している地方都市を比較し、その変化から山内マリコの中での地方都市に対する考えや見方の変化についての考察を行う。

### 三十一 『こは退屈迎えに来て』における地方都市

『こは退屈迎えに来て』は、ある地方都市を舞台とした、八つの作品が収録された短編集である。作中の年代や主人公となる人物はすべて異なっているが、すべての作品中に椎名という人物が様々な立場で登場している。椎名はとある地方都市出身の男性であり、学生時代はクラスの中心人物として、みんなに憧れられる存在であった。しかし、年齢を重ねることで冴えない人物に変わってしまった。『こは退屈迎えに来て』の中に登場する人物たちは、学生時代のクラスメイトや友達、妹、結婚相手などそれぞれの立場で椎名に関わっている。作品ごとの登場人物たち同士の交流は書かれていないが、椎名を通してすべての物事が一つの場所で起っていることが分かる。

八つの作品のうち、大阪のクラブで椎名と出会う、「アメリカ人とリセエンヌを除いた七作品は、一つの地方都市に関連している。『こは退屈迎えに来て』において舞台となっている地方都市は、『メガネと放蕩娘』と同様に作中では具体的な地名が明記されていない。しかし、インタビュの中でこの地方都市のモデルは山内マリコの地元である富山市であることが語られている」<sup>三〇</sup>。

短編集のそれぞれの作品の主人公は地方都市が舞台、又は地方都市出身である一五歳から三〇歳の女性がほとんどであり、物語の始まり時点で結婚をしている人物は誰もいない。また学生やフリーターなどが多く、お金に余裕がそれほどなく、社会的な地位が確立し

ている人物はいない。これらのことから、『こは退屈迎えに来て』に登場する人物たちは全体的に若く、どちらかと言えば庇護される側であることが分かる。作中で書かれている悩みも恋愛や性、将来など自分自身に関連するものが多い。

これらの登場人物たちにとって地方都市は退屈で、つまらないものである場所として語られる。登場人物たちは地方都市に対して受動的であり、退屈な場所であるただ受け取るのである。この受動的な態度は自身の悩みに対しても同様であり、比較的流程に身を任せて行動する様子が多くみられる。特にこの様子が顕著にみられるのは「東京、二十歳」<sup>三四</sup>である。以下、「東京、二十歳」のあらすじを記す。主人公は地方都市出身の学生であり、高校時代の家庭教師に憧れて、彼女のようになりたいと東京の大学に進学する。しかし東京での生活に上手く馴染むことが出来ず、かつて憧れた家庭教師のように家庭教師のアルバイトを始めるが、思っていたような大学生活を送ることが出来ない、という物語である。この主人公は『こは退屈迎えに来て』の短編中では数少ない、地方都市を出て上京している人物である。彼女は東京に出ることで自分自身が憧れの人物のようになることが出来るのではないかと考えていたが、結局東京での生活に馴染めず、自分自身も変わらなかつた。自分を変えるのではなく、場所によって自分がよりよくなると受動的に考えていることが、地方都市を退屈にしている要因であることに気づくことが出来ないのである。

「東京、二十歳」の主人公以外にも、全体を通して主人公は今



ある不安や不満は他者や環境が解決してくれるのではないかと考えている人物が多く、自分自身の力により、今ある環境をよりよいものへ変えようとする意志があまり見られない。

以上ことから『ここは退屈迎えに来て』の中で描かれる地方都市は、主人公たちが受動的な姿勢でいることで、退屈な場所というイメージが固定されており、作中ではマイナスのイメージで語られている。

### 三二 『メガネと放蕩娘』における地方都市

『メガネと放蕩娘』の作品の舞台は、富山をモデルとした地方都市である。主人公であるタカコは地方都市の商店街で生まれ育ち、市役所で務めているという人物である。『ここは退屈迎えに来て』など従来の山内マリコ作品における主人公の中では珍しく、地方都市と都会を比較するのではなく、かつての地方都市と今の地方都市を比較している点がこれまでの主人公の考え方とは大きく異なる。生まれ育った商店街で暮らし、市役所職員となったタカコは仕事上まちづくりに関わることも多い。

『メガネと放蕩娘』の中で準主役級に登場する人物は、一度地方都市を出た人物や、他の地域から地方都市へ来た人物が多い。一度地方都市を出て戻ってきた人物として、シヨコと蓮沼、他の地域から商店街へ来た人物としてまゆみ先生、潮見片桐が挙げられる。主人公の妹であるシヨコは地方都市を出て、東京ではカリスマ店

員であったが、出産のためにシングルマザーとして一〇年ぶりに商店街へ戻ってきた。蓮沼は商店街出身でありながら、東京大学を卒業し、東京で大企業に勤めていたが、地元に戻り、事務局長となった。この二人は若いときに東京での生活をし、それなりに成功をしたのちに地元へ戻ってきているという共通点がある。どちらも思い切りがよく、まちづくりに特に精神的にかかわっている点も共通している。

大学の専任講師であるまゆみ先生や、商店街で店を営業しているが、商店街出身ではない潮見、まゆみ先生のゼミの学生としてまちづくりに関わる片桐は他の地方都市からやってきた人物として登場する。この三人は現在の商店街を客観的に見る事が出来る人物であり、現在の商店街に対して問題意識を持つ人物である。

『メガネと放蕩娘』の中で書かれている地方都市は商店街を中心とした非常に狭い地域である。現在の商店街に不満を持ち、より良くすることを登場人物たちは目指している。作中ではかつての商店街と現在の商店街が比較されることが多く、登場人物たちは商店街を以前のように活気づけることを重視し、自分たちがどのように活動すればよくなるのかを前向きに考え、行動を行う。地方都市に対して能動的に行動を行うのである。特にタカコのような商店街の外に出たことがない人物よりも、シヨコのような商店街の外で暮らしたことがある人物が積極的に行動をしている。

作中に登場する人物たちは片桐を除き、過去の作品と比較すると、年齢も高く、職を持ち、社会的にある程度の立場がある人物が多く、

保護を行う立場である。作中で比較的若いシヨークも母親であり、保護者である。自分自身だけではなく、周囲を広く見ることが求められている。

以上のことから、『メガネと放蕩娘』の中で描かれる地方都市は、登場人物たちにとって今よりも良くするために能動的に活動をする場所である。よって作中では現在のマイナスをプラスにするための場所として、前向きなイメージで語られている。

### 三二二 まとめ

『ここは退屈迎えに来て』が二〇一八年に映画化の際のインタビュー中に、山内マリコは地方都市を舞台とした作品を書くことへのきっかけについて次のように述べている<sup>一五</sup>。

地方都市を書くこうと思っただけは、街の変化ですね。私が10代だった1990年代は、中心市街地や商店街が若者の遊び場だった、ギリギリ最後の時代。2000年前後に大店法の改正もあり、どんどん郊外にショッピングモールやチェーン店ができるようになって、人の流れが変わっていききました。年に何度か帰省すると、目に見えて街なかから人が減り、店がなくなっていく。そういう景色を見ると、「これでいいのか？みんな、なんとも思っていないの？」と疑問を持つようになりました。

原作小説を出した2012年の時点では、自分にとってリアル

な地方都市ってあんまり描かれてなかったんですね。田舎イコール『天然コケッコー』（くらもちふさこ著・1994年）みたいな、のどかなイメージがあるけれど、私が生まれ育った場所は、田舎は田舎でも、自然なんかなくて、車がビュンビュン走って、みんなすぐ消費社会的な生活を送ってる。そういう中で育った自分を、どう捉えていいか掴みかねていて。

山内マリコにとって地方都市は、一般的に田舎と呼ばれるほどのどかなものではなく、消費社会的である。この世間が持つ田舎のイメージと現実には田舎と呼ばれる地方都市とのギャップについては、二〇一四年に出版された短編集『さみしくなったら名前を呼んで』に収録されている「八月二十二日はじまっちゃった」<sup>一六</sup>でも書かれており、リアルな地方都市を書くことについて、初期から意識を持っていたと考えられる。

このリアルな地方都市に対しては、『ここは退屈迎えに来て』が出版された二〇一二年と、『メガネと放蕩娘』が出版された二〇一七年では受け取り方が変化している。

山内マリコは『ここは退屈迎えに来て』と『メガネと放蕩娘』の登場人物について次のように述べている<sup>一七</sup>。

私、デビュー作で地元を「退屈」と言い切ってしまったのを密かに気に病んでいて（笑）。つぐないの気持ちも込めて書きました。デビュー作では主人公は10代〜20代の若者で、ひたすら

受け身だったけど、新作は33歳→37歳の、中年のはじまり(?)くらいの年齢設定。退屈な街を憂うだけじゃなく、その街を自分たちの手で変えよう、なんとかしよう、主体的に奮闘していきます。

このように登場人物たちの年齢と思考、行動が変わっていることを述べている。

この変化は山内マリコ自身の環境の変化によるものであると推測できる。『こは退屈迎えに来て』が出版された二〇二二年当時に山内マリコは三三歳であった。当時は作家としての仕事も軌道に乗る前であり、結婚もしていなかった。しかし、『メガネと放蕩娘』が出版された二〇一七年当時は三七歳、仕事も軌道に乗り、自身の二作目である『アズミ・ハルコは行方不明』も映画化された。私生活では結婚をし、公私共に充実している。

このような生活の変化や自身が年齢を重ねたことにより、地方都市に対する受け取り方が変化したと考えられる。『こは退屈迎えに来て』の時点では退屈な場所であると書いた地方都市を、『メガネと放蕩娘』ではどのように良くしていくかを書いている。地方都市に対して、受動的な立場から、能動的な立場へ変わっているのである。これは作中に登場する人物たちと山内マリコ自身の年齢による立場の変化が大きいと考えられる。『こは退屈迎えに来て』の作中に登場するのは一五歳から三〇歳の結婚する前の女性である。これらの登場人物はどちらかと言えば庇護される側の人物であり、

恋愛や性、将来など自分のことについて悩み、精いっぱいな様子が書かれている。その悩みやくすぶりの一つに地方都市で生きる自分がある。一方の『メガネと放蕩娘』に登場する人物たちは、年齢層も高く社会的に地位のある人物が多いこともあり、どちらかと言えば庇護する側の人間が多い。作中では比較的若い、主人公の妹であるシヨウコや初登場時大学生であった片桐ですら、作中で自身の今後よりも街のこれからについて心配している。

『こは退屈迎えに来て』をはじめとする、山内マリコ作品の初期に登場する人物たちは自分の将来、特に結婚や自分の居場所について悩んでいた。これは作品を書いていた当時の山内マリコ自身の不安が反映されていたと推測できる。山内マリコ自身が結婚し、自分の居場所を見つけることで、この不安を乗り越え、自分以外のこと、特に周囲の環境について悩むことができるように変わっていったと考えられる。同じ地方都市を舞台としても、『メガネと放蕩娘』ではより前向きに捉えるように変化している。

#### 四 初出と初刊による変化

『メガネと放蕩娘』の特徴として、初出と初刊で大幅な書き換えが行われていることが挙げられる。

『メガネと放蕩娘』の初出は、雑誌『CREA』で二〇一四年三月号〜二〇一六年六月号の計二七回の連載である。雑誌連載を行っていた間には、『さみしくなったら名前を呼んで』『パリに行っ

たことないの<sup>二</sup>、『かわいい結婚』<sup>三</sup>、『東京23話』<sup>三</sup>、『買い物とわたし お伊勢丹より愛をこめて』<sup>三</sup>』が出版、私生活においては二〇一四年一月に結婚しており、作品連載中に公私共に非常に多くの出来事が起きている。『メガネと放蕩娘』の初刊は二〇一七年一月に出版されている。初出の連載終了から初刊の出版には約一年半が経過している。

初出と初刊の書き換えは大きく四つに分けられる。それは登場人物の人物像の変更、エピソードの順序入れ替わり、初刊でのエピソードの削除、初刊でのエピソードの追加である。

ここでは特に重要と考えられる、登場人物の人物像の変更点と作中エピソードの削除と追加についてそれぞれ提示し、理由の考察を行う。

#### 四―一 人物像の変更

『メガネと放蕩娘』の作中において、初出と初刊では登場人物の人物像が大きく書き換えられている。初出と初刊においての、作中における重要人物の人物像の変更について述べる。

一人は地元の大学で教師として勤めるまゆみ先生である。初刊でのまゆみ先生について書かれた箇所を引用する。

地元の国立大学の社会学部、都市環境デザイン学科地域コース専任講師、原まゆみ。三十代に見えるけど、年齢不詳の美人が概

ねそうであるように、おそらく四十代前半と見た。ノースリーブから延びる腕がほっそりして、派手ではないけどきれいな人だ。

初刊におけるまゆみ先生は地元の国立大学で講師をしている美人という人物である。生徒から「オリンピックまでに結婚できるといいですね」と言われている点や、学生になめられていると自身が発言していることから、優しく穏やかな人物として書かれている。一方、初出でのまゆみ先生について書かれた箇所を引用する。なお、初出ではまゆみ先生の名前は漢字で「真弓」と表記されている。

真弓先生は離婚後に大学に戻って博士課程を終えた、いわゆるボストドクターってやつだ。大学の非常勤講師をしながら『ブルックリン』に常駐して学生たちの世話役みたいなことをしている。バツイチで子供もいないし再婚する気もゼロ。実家が裕福だからボストドクでもやっていけるのだという。親の介護に駆り出されるまでは好きにやらせてもらいますと、本人曰く「まともには生きていることをやめた」自由人だ。商店街のセレクトショップの上顧客で、いつも気合の入ったコーディネートをして、きれいに化粧している。足元だって最低七センチのヒールが信条である。

初出におけるまゆみ先生は初刊での人物像とは大きく異なっている。大学の非常勤講師をしている自由人であり、ファッションにもこだわりのある強気な女性として描かれている。初刊でのやさし

く穏やかな人物像とは異なり口調もきつく、タカコのことを「アンタ」と呼んでいるなど口が悪い。

もう一人はまちづくりに協力を行う学生の片桐である。初刊での片桐はまゆみ先生のゼミに所属する学生として登場する。初登場時は大学四年生であり、頼りなく不器用に見えるが、真剣に商店街のことを考えており、イベント計画の反省点から、「商店街シェアハウス化計画」を卒業論文のテーマに選ぶ。さらに商店街でのシェアハウスから買い物ツアーの企画を行うなど作中では非常に商店街の活性化に向けて活動を多く行っている。卒業論文を提出後、地元である千葉県に戻ったが、企画はゼミの後輩たちに引き継がれている。さらに主人公のタカコに自身の兄である聡を紹介し、聡は後にタカコと結婚することとなる。作中で登場している主要人物の中では非常に若いものの、商店街の活性化のために尽力を尽くした青年として書かれている。

一方、初出における片桐を見る。初出では商店街に学生をホームステイさせる企画の参加者として登場する。大学を出た後にメーカー会社に勤めていたが、仕事をやめ転々とした後に大学院に入りなおした二十九歳である。商店街や他の女子学生とも馴染み、ヘラヘラしている様子から商店街のおじさんからの受けもよい、頼りなく見えるが世渡り上手な人物として書かれている。商店街について調査を行った修士論文が書籍として発売され、四国の大学の准教授となり、主人公のタカコと結婚する。

片桐は年齢や立場も初出と初刊では大きく変わっている。初出で

のヘラヘラとした頼りなく見える大人の男性から、真面目でまちづくりに積極的に関わる学生として人物像が変更されている。

#### 四二 エピソードの削除

『メガネと放蕩娘』では初出と初刊の間でエピソードの順序の変更、削除が大幅に行われている。

初刊におけるエピソードの削除において、最も大きなものは商店街の内部に住んでいる人物に関連したエピソードの大幅削除である。初出における該当する話数は第五話「謎のおかみさん」、第六話「商店街の真のリーダー!」、第七話「おばちゃんと作戦会議!」、第十話「青年部、視察旅行へゆく」の四話である。以下、第五話から第七話のあらすじを述べる。

働いている間に娘である街子の面倒を誰にみてもらうかと考えたシヨコは、祖母に昔は困ったことがあったときはおかみさん会での相談をしていたと教えてもらう。助言を受けて、婦人会に収集をかけて商店街の人たちと協力をして子育てを行うことができないかと相談するが、婦人会の人々は無言となり予定時間の半分で話し合いは終了してしまう。その後、婦人会のリーダーである高田薬局のおばちゃんからのアドバイスをうけ、作戦会議を開始し、空き店舗となった高田薬局の本店をデイサービス施設である《まちなかハウス》として、活用することを決定する。

以下では、第十話「青年部、視察旅行」の内容をまとめる。

商店街再生の活動行うためには、商店街内の役職についている方がよいと、商店街で服屋《リスキージョイ》を営業する潮見を商店街の青年部に入れようとタカコとシヨコは考える。しかし、入るには青年部二人以上の推薦が必要であることを事務局にて言われる。青年部には若者であれば女性でも入ることが出来ると知ったシヨコはタカコと二人で青年部へ入ることとなる。その後、青年部の活動として熱海への視察旅行へ行くこととなるが、実際は地元を離れて息抜きを行うためのただの旅行であった。青年部の現実に失望したタカコとシヨコは一人残っていた《梅津履物店》の梅津を引き入れ、青年部を抜けて新たに活動を行うことを決意する。

初出の第五話から第七話は商店街の婦人会の多くの人々から子育ての協力を得られない失望が書かれる一方、リーダーである高田薬局のおばちゃんからの協力を受けて、新たなプロジェクトを行うきっかけとなる前向きな様子が書かれている。初刊ではこのエピソードがすべて削除されており、高田薬局と《まちなかハウス》の少し登場している。高田薬局はウチダ書店の左隣にある店舗として書かれており、《まちなかハウス》は第七章 二〇二年 再び、放蕩娘の帰還」の中で、再開された商店街で過去に失敗した託児所の経験を受けて作られた、新たな施設として書かれている。初出では老人、障害を持った人、赤ちゃんや子供と一緒に受け入れられる施設として運営され、かつ子供を預けた人々が商店街での買い物を行うことで、商店街への利益も期待ができる場所となる予定であった。しかし、結局は老人たちのたまり場となり、子供を預けてい

る人々も特に商店街での買い物を行わないため、利益が生まれないことが第七章以降で書かれている。

この削除された話数では商店街内部の人間の多くがまちづくりに対して非協力的であり、まちづくりに関心を持っている人間が少ないことが書かれている。これらの登場人物たちの中でタカコとシヨコに対して比較的協力的であるのは高田薬局のおばちゃんのみである。初出において商店街内部に長らく住んでいる人間の多くは、シヨコやまゆみ先生、蓮沼、片桐などの商店街外部にいた期間の長い、商店街の活性化に対して協力的な外部の人々との対比として書かれていると考えられる。このような商店街の活性化を行う中での非協力的な人間の多くは、年齢が主人公たちよりも一回り以上高い。長く商店街に住んでいる人間が多い。

#### 四一三 エピソードの追加

商店街内部の人間に関するエピソードが削除された一方、新たに追加されたエピソードはまゆみ先生のゼミに参加する学生たちに関するものである。

初出において、まゆみ先生と片桐たち学生たちが活躍するエピソードは第一八話「商店街に來たれ、若者よ」から第二二話「片桐くんとの会話」までの第四話のみである。以下、あらすじを述べる。『ローマ法王に米を食べさせた男』の中で取り組まれているような、学生など若い人たちを農家に泊めるホームステイを行うことで、

交流を盛んとさせる取り組みを商店街で行うことを出来ないかとまゆみ先生が提案する。家での仕事を学生たちに協力してもらえようにマッチングを行うことで、商店街側にも利益が生まれるように計画を決める。事務局長である蓮沼との相談により、介護士志望と保育士志望の女学生、聞き分けのよい女学生と対比させ、仕送りを打ち切られた「バカそうな」男子生徒の片桐をホームステイに受け入れることを決定する。すでに店じまいをした、紙屋、洋傘店、喫茶店でのホームステイが始まり、商店街での学生たちによる生活が始まる。その中でもヘラヘラとして頼りなく見える様子から、特に商店街の人々に受けの良い片桐が、商店街をテーマとした「衰退した商店街で人は生きていけるのか」を修士論文として書くことを決める。

初出における学生たちと商店街のエピソードは、商店街でのホームステイのみであり、登場人物たちも学生三名のみである。唯一名前があり、主要人物である片桐も二九歳の大学院生であり、学生たちの中ではそれほど若い人物ではない。

一方の初刊における学生たちのエピソードが書かれている章は第三章「二〇一五年 イベントが大好き♡」、第四章「二〇一六年 商店街シェアハウス化計画」であり、全七章中の二章に学生が関わっている。以下、これらの章のあらすじを述べる。

商店街のにぎわい創出のためにイベントを行うことが決まり、まゆみ先生は講義の一環として学生をボランティアスタッフとして活動を行ってもらうことを決定する。手作り市とファッションショ

ーを行うこととなり、準備を学生たちの協力のもと当日を迎えるが、出店班で指揮を執っていた町田が来なくなる、イベント終了後に騒音被害のクレームが多数入っていたことによる警察からの注意を受けるなど問題が幾つも起こってしまう。これらの結果を受け、出店班のスタッフ片桐による商店街の活性化が必要であるのかを疑問視したレポートが書かれる。問題点を受け、商店街の活性化させるために「商店街シェアハウス化計画」を卒業論文のテーマとして決定し、片桐が商店街での生活を行うことを決める。事務局長である蓮沼からの許可をもらい、ウチダ書店、鹿島屋、兵藤寝具店、団子屋、そば処、小松庵で一か月ごとにステイする。この経験から一人では入りにくい店を回る、買い物ツアーを提案、市役所職員の星野の協力もあり、提案は実現する。その後、片桐は大学を卒業したが、まゆみ先生のゼミ生たちにより、「商店街シェアハウス化計画」は引き継がれることとなる。

第五章「二〇一七年（上半期）うちの店、貸します。」でも片桐が卒業論文のために行ったヒアリング調査をまちづくり活かなど、学生である片桐の影響は後にも活かされている。

初出で書かれているホームステイの計画は片桐による「商店街シェアハウス化計画」とその後のまゆみ先生のゼミ生たちに引き継がれたことを合わせたような内容である。初出ではホームステイ計画は大人であるまゆみ先生の提案である一方、初刊では「商店街シェアハウス化計画」は学生である片桐の提案である。初刊では初出と比較し、学生がより主体的に行動を行う様子が書かれている。イベ

ントスタッフに関しても運営を主体的に行い、「商店街シェアハウス化計画」、買い物ツアーと、学生である片桐はかなり精力的にまちづくりに携わっている。

#### 四一四 まとめ

初出と初刊の間で主要登場人物たちの人物像、エピソードの削除追加が大幅に行われている。この変化の内容には、先生であるまゆみ先生、生徒である片桐といった人物像が変化した人物が強く関わってきている。強気で派手な印象から、優しく穏やかな印象に性格が変更されたまゆみ先生、ヘラヘラとしており頼りなく見える二九歳の大学院生から気弱だがまちづくりに精力的に関わる大学四年生に変更された片桐のどちらも角が立たない、人から嫌われにくい人物像に変更されている。この初出と初刊においての二人の人物像の変更にはどのような意図があるのだろうか。

まゆみ先生の人物像は、初刊での学生に関わるまちづくりのエピソードの増加が影響していると考えられる。初刊では学生によるまちづくりに関するエピソードが増加したことにより、まゆみ先生が他の登場人物たちと関わる機会が増えている。学生たちを手助けする立場であることから、商店街の中の人物にも受け入れてもらいやすい性格かつ、生徒に慕われる穏やかで優しい性格に変更されたのではないだろうか。初出時の自由人な人物像は良くも悪くも子供っぽいとも取れたが、教師としての立ち位置が強調されたことによっ

て、生徒たちにとって保護者のな人物像に変更されたと考えられる。

片桐の人物像は、まちづくりに若者が関わるという要素を強調するために変更されたと考えられる。初出時は主要な登場人物が全体を通して三〇歳以上が多く、最も若いのがショージであった。一方の初刊では学生によるまちづくりが多く、地方活性化を行うために必要な「よそ者・バカ者・若者」のうち、若者の要素を強く押し出すための変更であると考えられる。初出における片桐は、千葉出身である「よそ者」であり、仕送りを打ち切られたことで、商店街へのホームステイに応募したことから、蓮沼によって「バカな子ほどかわいい」と評価されている。このことから、「バカ者」としての要素を強く持つて書かれたと推測できる。初出で「若者」の要素を持つのは「バカ者」の要素も持つショージと、しいていえば大学院生である片桐であるが、どちらも社会人の経験があり、十分に大人と呼ぶことが出来る、「若者」と呼ぶには少し高めの年齢に設定されている。

初刊では片桐をはじめとした、まゆみ先生のゼミの学生たちが多く登場する一方、商店街内部の人々によるエピソードが大幅に削除されている。これらの変更については、追加された学生たちによるまちづくりのエピソードを強調する効果を持たせ、地方活性化に必要な「よそ者・バカ者・若者」の要素を強調するために削除されたと考えられる。また、まちづくりに対して協力的ではないことから、商店街内部の人々に対するマイナスイメージともとることが出来るため、初刊の出版にあたり削除されたとも推測できる。



以上より、初出と初刊における大幅な変更は、学生によるまちづくりを重視したことに関連していると推測できる。

## 五 学生によるまちづくり

第四章において、初刊での大幅な書き換えの中でも特に学生によるまちづくりが非常に多く追加されていることを述べた。このことから、初刊にあたり追加された、学生たちによるまちづくりのエピソードが非常に重要であると推測できる。作中の学生たちによるまちづくりについての考察をする。

初出では、商店街の活性化に向けて活動を行っているのは、主人公であるタカコと妹のシヨコ、商店街の他の店舗とは異なる雰囲気を持った店を営業している潮見、大学で非常勤講師として勤めるまゆみ先生が中心である。これらの人物は商店街内部や商店街によく来ている人物である。一方、初刊では初出の人たちに加え、片桐をはじめとしたまゆみ先生のゼミの学生が登場する。学生たちは大学から少し離れた商店街にはほとんど来ず、商店街のしがらみに全く関係のない人物である。

第二章で引用したように、地方活性化には「よそ者・バカ者・若者」が必要であると言われている。この地方活性化に必要な「よそ者・バカ者・若者」のうち、作中で登場している学生たちはすべての要素を含む可能性がある。まちづくりに興味があるはずのまゆみ先生のゼミの学生は入学してから卒業までの四年間に、一度も商店

街へ来たことがない学生がほとんどであることが、作中では書かれている。電車で三〇分の距離に住んでいながらも、商店街へはほぼ来ない、しがらみのない「よそ者」であり、そして自分の考えを表現させるために動く行動力がある「バカ者」である。そして、まだ社会に出たことがなく、学生である「若者」である。特に、作中で最も活躍する学生である片桐は、このすべての要素を持った人物である。商店街内部の人だけでは上手いかないうちまちづくりの中に、この要素を持った学生が入ることにより、新たな風を吹かせることが出来るため、地域活性化が起る要因となると考えられる。

商店街外部に住んでいる人々や若者に対し、商店街内部だけの問題ではないということを問題提起させる効果も持っている。初出では、商店街に関わりの深い人物が多い中、商店街との関わりが薄い人物を登場させることで、商店街外部に住んでいる読者に向けても自分のこととして受け取らせることが可能となる。

また、学生がまちづくりに携わることとはモデルとなった富山市でも行われている。山内マリコはインタビューの中で次のように述べている <sup>316)</sup>

取材協力をしていただいた市役所の方に読んでもらったら、「あまりにも自分が普段接している話すぎて、これが小説として面白いのか面白くないのか全くわからない」って言われました。

このように山内マリコは作品を書くにあたり、市役所職員に対し

でも協力をお願いしている。富山市では毎年、学生が商店街の活性化に向けて活動を行う「学生まちづくりコンペティション」が行われており、主催者であるまちづくりとやまには富山市役所の人々もいる。また、作中で登場するイベントには、過去に「学生まちづくりコンペティション」にて採択されたものもある。以上のことから、作品を書くにあたり、学生によるまちづくりについての調査も行っており、学生によるまちづくりに対して関心があったことが推測できる。

## おわりに

『メガネと放蕩娘』は作品の中では具体的な地名が登場しないが、その一方でモデルとなった富山県富山市の総曲輪通り商店街、中央通り商店街に関連した要素が多くみられる。作品の中で書かれている商店街は、学生時代に通っていた思い出と現在作品を書くために調査した二つの時代が書かれている。現実と作中の時代がおおよそ一致している中で、「フリークポケット」をモデルとした「マンスリーショップ《The Free Pocket》」は、作中では現在に行われている。「フリークポケット」は山内マリコにとつて、学生時代に通った思い出の場所であり、未来と希望が溢れている場所であった。かつてと変わってしまった商店街を今よりも良くするためにはどうしていけばよいのかを、『メガネと放蕩娘』では富山市をモデルとして、山内マリコの考えを書いているのである。

現在の山内マリコにとつて、地方都市、特に地元である富山の変化は嘆かわしいものであり、自身も協力をしていきたいと考えている。この山内マリコにとつて地元である富山への思いは、かつて富山をモデルとした時とは、変わってきている。初の短編集である『こは退屈迎えに来て』の中では退屈でつまらない場所として書かれていた富山をモデルとした地方都市が、『メガネと放蕩娘』の中では自分たちで変えていくべき場所として書かれている。この変化は山内マリコの生活の変化、年齢の変化によるものであると考えられる。学生時代に通っていた商店街の思い出、地元での息苦しさを感じて都会へと出ていった経験、帰省をしたときに活気のなくなった商店街を寂しく思う気持ち、どうにか現状を変えることが出来ないかと前向きな思い、このすべての要素が『メガネと放蕩娘』の中で書かれている。

また、地方活性化には内部の人々だけではなく、外部の人々による協力が必要であることも伝えている。特に若者の力が必要であることは、初刊において強調されている。この若者が地方活性化に携わることは、『こは退屈迎えに来て』などの山内マリコ初期作品で多く書かれていた地方を退屈と考える人物たちとは大きく変わっている。この若者の書き方の変化も、山内マリコの考え方の変化によるものであると考えられる。

作中において具体的な地名は登場せず、多くの人々が自分のように受け取れる作品である。しかしその一方で、作品中の端々から富山の要素が感じられる。以上のことから、『メガネと放蕩娘』は

山内マリコが現在の富山を思う気持ちしが詰め込まれた作品である

ことが分かる。

- 一 山内マリコ『メガネと放蕩娘』『メガネと放蕩娘』文藝春秋 二〇一七年一月
- 二 「文筆家・甲斐みのりさん×小説家・山内マリコさん」【第1回】土地の魅力は「加減法」でキヤッチを「地方めぐりがもたらした秘訣とは？」『アノ食堂』二〇一八年三月一日 (<http://ananoishokudo.jp/visitor/116889>) 二〇一九年一月十五日閲覧
- 三 「20代で結婚しなきゃ」という呪い——地方と東京の生き方を描く作家・山内マリコさん『はたらく女性の深呼吸マカジン「りっすん」』二〇一七年一月二日 (<https://www.e-aidem.com/ch/listentry/20171122110000>) 二〇一九年一月十五日閲覧
- 四 「商店街のあたたかい場所を次の世代に残せたら」『リンネル』二〇一八年一月号
- 五 山内マリコ『「」は退屈迎えに来て』幻冬舎 二〇一二年八月二十五日
- 六 「山内マリコ」地元・富山をデイスった罪ほろぼしを「文春オンライン」二〇一七年二月三日 (<http://bunshun.jp/articles/4928>) 二〇一九年一月十五日閲覧
- 七 山内マリコ『メガネと放蕩娘』『CREA』二〇一四年三月号〜二〇一六年六月号
- 八 「文筆家・甲斐みのりさん×小説家・山内マリコさん」【第1回】土地の魅力は「加減法」でキヤッチを「地方めぐりがもたらした秘訣とは？」『アノ食堂』二〇一八年三月一日 (<http://ananoishokudo.jp/visitor/116889>) 二〇一九年一月十五日閲覧
- 九 『まらのカケラ』中央通商店街振興組合 二〇一四年一月二十四日
- 一〇 「20代で結婚しなきゃ」という呪い——地方と東京の生き方を描く作家・山内マリコさん『はたらく女性の深呼吸マカジン「りっすん」』二〇一七年一月二日 (<https://www.e-aidem.com/ch/listentry/20171122110000>) 二〇一九年一月十五日閲覧
- 一一 「商店街のあたたかい場所を次の世代に残せたら」『リンネル』二〇一八年一月号
- 一二 「山内マリコさんインタビュー」あの頃、胸ときめかせた商店街の現状は？『メガネと放蕩娘』『クロワッサン』二〇一八年一月二十五日
- 一三 「山内マリコ」地元・富山をデイスった罪ほろぼしを「文春オンライン」二〇一

- 七年一月三日 (<http://bunshun.jp/articles/4928>) 二〇一八年二月五日閲覧
- 一四 山内マリコ『東京二十歳』『「」は退屈迎えに来て』幻冬舎 二〇一二年八月十五日
- 一五 「「」は退屈迎えに来て」原作・山内マリコインタビュー「地方でモヤモヤしてる人に自分たちの物語も素敵なんだと思ってもらいたい」『ガジェット通信』二〇一八年一月二日 (<https://getnews.jp/archives/2092710>) 二〇一九年一月十五日閲覧
- 一六 山内マリコ『八月三十二日はじまっちゃった』『「」は退屈迎えに来て』幻冬舎 二〇一二年八月十五日
- 一七 「20代で結婚しなきゃ」という呪い——地方と東京の生き方を描く作家・山内マリコさん『はたらく女性の深呼吸マカジン「りっすん」』二〇一七年一月二日 (<https://www.e-aidem.com/ch/listentry/20171122110000>) 二〇一九年一月十五日閲覧
- 一八 山内マリコ『さみしくなったら名前を呼んで』幻冬舎 二〇一四年九月
- 一九 山内マリコ『パリに行ったことないの』CCCメディアハウス 二〇一四年二月
- 二〇 山内マリコ『かわいい結婚』講談社 二〇一五年四月
- 二一 山内マリコ『東京23話』ポプラ社 二〇一五年八月
- 二二 山内マリコ『買い物とわたし』お伊勢丹より愛をこめて「文春文庫」二〇一六年三月
- 二三 「80年代生まれの焦燥と挑戦——山内マリコ「いい時代を知らないから」その強みがある」『Rolling Stone Japan』二〇一八年一月九日 (<http://rollingstonejapan.com/articles/detail/28013>) 二〇一九年一月十五日閲覧

商店街店舗	初刊	モデル	メモ
1 古着屋	p6 3行目, p19 8行目, p49 11行目		90年代半ば郊外移動 メキシコアクセサリー店の隣、地下にあるおしゃれなショップ
2 中スレコード屋	p6 3行目		90年代
3 ウチダ書店	p6 7行目など	竹島屋布専門店(姉妹モデル) 瀬川書店(店)	主人公の家 商店街ステイ先
4 映画館	p6 10行目		昭和初期
5 カフェ	p6 10行目		昭和初期
6 おもちや屋	p8 3行目		姉妹幼少期
7 本屋	p12 11行目	清原堂(マリエ書山店)	本店閉めてショッピングセンターに支店
8 ブックス・スズキ	p12 11行目, p166 14行目	ブックス・ナカダ	1990年代 90年代普通の本屋→ヴィレバン化、10年前に閉まる
9 古本屋①	p12 11行目		1990年代
10 古本屋②	p12 11行目		1990年代
11 マクドナルド	p19 4行目, p43 10行目, p46	マクドナルド	壊れた 向にある、1980年代中頃青果店があった場所にてできる
12 レコード屋	p19 14行目		
13 ニシ文具店	p19 15行目, p50 10行目		世界中の文具品を並べた店、小坂陽蔵
14 アクセサリー店	p19 15行目, p49 11行目		壊れた 兵衛文具店隣 メキシコのアクセサリーー現在空き店舗
15 雑貨店	p19 15行目	雑貨店「テング」	超先取り
16 名産品茶「白樺」	p19 16行目, p34 14行目	喫茶茶「白樺」、チュリオ	搬送、はしっこにある、喫茶店
17 書店	p20 13行目など	中田書店	郊外にチェーン店<タカダブック>、ウチダ書店左隣
18 ソニブラ	p29 8行目	ソニープラザ	搬送
19 コンビニ	p29 15行目	ファミリマート	搬送
20 商店街の事務所 商業会事務所	p30 14行目	中央通商業会	ウチダ書店から数軒先、ビル3階
21 はなと美装室	p30 14行目, p49 15行目	はなと美装室	ウチダ書店から数軒先、ビル1階、2階
22 CD屋	p43 12行目		壊れた
23 ゲーヤン	p43 14行目	Hi-TECH SEGA	壊れた
24 雑貨屋	p43 14行目		壊れた
25 帽子屋	p46 11行目, p152 14行目	石谷もちや	マクドナルドの向かい 商店街ステイ先
26 兵衛の魚屋	p48 7行目, p152 8行目	牛島屋	ウチダ書店から兵衛文具店を挟んで向こう隣り、商店街ステイ先
27 雑貨専門の洋服店	p48 11行目		ウチダ書店、高田文具店などの並びにある、数年前に閉めた
28 兵衛文具店	p49 7行目, p152 10行目	兵衛文具店	ウチダ書店右隣 10年前に閉めた、商店街ステイ先
29 生活雑貨屋	p49 12行目		古着屋の後にオープン補助金が出た壊れた
30 そば処・小松屋	p50 9行目, p152 16行目		はなと美装室隣 商店街ステイ先
31 梅津屋物産	p56 7行目	田中屋物産	白樺の斜向い、青年部会計梅津くん ショーコの同級生
32 画廊	p64 7行目		壊れた リスキージョイ隣
33 セレクトショップ《リスキージョイ》	p64 ~	greenroom, carnation	10年ほど前に閉店
34 民衆所	p85 3行目~		梅津くん提案 民間企業に委託 家賃補助期間後撤退
35 藤屋	p92 11行目		閉めた
36 スナック《みほこ》	p114 2行目		商店主引きつ
37 帽子屋	p152 15行目	トヤ帽子店	商店街ステイ先
38 テーラーサエキ	p156 14行目	テーラーゴソー	新屋、買い物ツアー
39 松下洋行店	p156 14行目		新屋、買い物ツアー
40 紙屋	p160 10行目		長年閉まっている、2回目 商店街ステイ先
41 時計店	p161 4行目		2回目 商店街ステイ先
42 金子不動産	p184 10行目~		商店街の土地を取り仕切る
43 マンスリーショップ《The Free Pocket》	p209 2行目	フリーポケット	旧ウチダ書店、地元工芸品のバイヤー
44 高層マンション	p222 13行目		大規模再開発一商店街が生まれ変わる、新住民
45 第三セクターのまちづくり会社	p233 14行目	まちづくりやま	ジョーコ、岸本ハイト
46 特定非営利活動法人まちなかハウス	p249 4行目	このゆびとーまれ	民衆所兼サービス

  

その他店舗	初刊	モデル	メモ
1 地元国立大学	p8 15行目など	富山大学	商店街までに河川にかかった橋を渡る、社会学部都市環境デザイン学科地域コース
2 ショッピングモール	p11 12行目, p42 8行目	ファボール	車で行く郊外にある、ウィルジアンガードがある
3 市役所	p12 1行目など	富山市役所	タカコ職場、ウチダ書店から徒歩10分
4 ラーメン屋	p24 11行目		裏通り
5 焼き肉屋	p24 11行目		裏通り
6 居酒屋《鳥や》	p24 13行目~	秋吉	裏通り、カウンターだけ、店構えがダイブ
7 西松屋	p42 10行目	西松屋	
8 ジュエリーショップ	p57 1行目~		商店街から少し入った場所、梅津紹介で壊れる
9 新作和食の店 割烹料理の店	p58 4行目		商店街から少し入った場所 梅津紹介
10 地元の美容専門学校	p100 3行目	富山美容専門学校	ファッションショーのヘアメイク
11 古本屋	p198 7行目		商店街から少し入った場所
12 寺の裏の一角にある長屋	p246 2行目	本願寺の裏にある長屋	古本屋、器屋、花屋、服屋